

# 学内広報

2014.12.19

no.1462



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

選出直後の会見の様子を余すところなく収録! 「次期総長」は何を語ったか?

五神 真 大学院理学系研究科長 が次期総長予定者に

# このかみ まこと 五神 真 大学院理学系研究科長 が 次期総長予定者に決定

選出直後の記者  
会見を全文収録



るものを借りてくるのではなくて自ら新しいアイデアや発想を出す力。これは最近の言葉でいえば創発的な能力というものです。そして、同時に自らを相対化できる広い視野を身につけてほしい。こうした力を鍛えるための道場が東大であると思っています。

そのために東大が提供すべきものは、世界トップレベルの学問にほかなりません。東大を、研究の最前線で知の興奮と喜びを実際に体験し、それを活力、糧として自己を大きく成長させる場にしたいと思います。その環境を整備することが、総長としての私の最も重要な責務であると認識しています。

東大に限らず大学における価値創造というものは、研究教育の現場で生まれます。その源泉はほかならぬ教職員と学生です。現場は知的活動の興奮と新しい発見の感動というものにあふれています。

私は専門が実験物理学で、特に光物理学の研究を長年進めてきました。東京大学で26年間研究室をもって教育と研究を進めてまいりました。通常、研究というのは非常に地味な活動です。こつこつとあきらめず続けることが大事ですが、ある時ぐんと世界が広がる瞬間があります。そうすると世界がぱっと見えてくる。そして世界中からその仕事が目される。それに引きつけられていろいろな若者が集まってくる。そこでまた若者が力をのぼす。そうしたことを、私はこれまでの研究生生活のなかで幾度も体験してきました。

このような世界に卓越した研究が東大の強みであり財産です。これを一段

## 五神 真先生の記者会見 (全文)

このたび総長予定者として指名されました五神真です。指名を受けまして、その重責に身の引き締まる思いをしております。本日の意向投票における構成員の皆様からの期待、及び総長選考会議の決定を非常に重く受け止め、東京大学、ひいては日本の研究教育の発展のために、微力ながら全力を尽くしてまいりたいと思い、お引き受けさせていただきますところでございます。

現在、グローバル化が加速している中で、社会には旧来のやり方では対処できない課題が山積しています。環境の問題、エネルギーの問題、格差の問題など、様々です。その解決には、新たな発想、アイデアが必要です。その鍵となる知を生み出すこと、ならびに人材育成、その両方の責務を東京大学は担っています。従って、その役割はきわめて重いと感じております。こ

れについての国民の負託にこたえるためには、東京大学は勇氣と英知と責任感を持って挑戦していかなければいけない。新しいものを目指して活動していくことが求められていると思っています。

“東大は学生の創発的な力を鍛える道場である”

幸いにも東京大学には、意欲にあふれ大きな可能性を秘めた学生が、全国あるいは世界からも集まっています。東京大学の学生諸君には大きな夢をもって挑戦者として研鑽を存分に積んでほしいと思っています。どういう力を鍛えてほしいかといいますと、原理に立ち戻って自分の頭できちんと考える力をまず養ってほしい。困難に直面してもあきらめないで考え続ける力、忍耐力も重要です。それから、すでにあ

11月27日(木)、濱田純一総長の任期満了に伴う次期総長予定者選考のための総長選考会議は、次期総長予定者として五神真先生を選出しました。有資格者2304人による意向投票の結果を考慮したものです。ここでは、同日夜に伊藤国際学術研究センターで行われた記者会見で選出直後の五神先生が語った言葉の数々を、誌面の許す限り掲載します。東大の舵取りを担う次期総長の熱い思いを感じ取ってください。

意向投票結果		11月6日の総長選考会議
第4回目投票結果		で絞られた5名の第2次総
有資格者数	2304人	長候補者を対象に、11月
投票総数	1612票	27日に単記無記名投票を
有効投票数	1599票	実施。3回目の投票で得
有効投票数の過半数	800票	票上位だった2名につい
白票・無効投票数	13票	て4回目の投票を行い、
五神真	894票	左の結果となりました。
宮園浩平	705票	
計	1599票	

と加速し、産官学の連携を進めながら、世界中のいろいろな世代の人々、若い学生だけではなくて社会に出たOBたちをも巻き込んで、「知の探求」を「知の活用」につなげて価値創造をしていく、大学をそうした中心地にしていくことが重要だと思っています。東京大学を、さまざまな人々が協力して新しい知をつくりだす、「共創プラットフォーム」にしたいと考えています。

## “共創プラットフォームづくりはまず大学院から”

どういふところから着手するか。私は2014年3月まで副学長として大学院教育改革を担当し、いろいろなプランをつくってきました。世界に通用する

卓越した大学院をつくるためのプランを進めているところです。まずそこから着手したいと考えています。

東京大学の活動は、時代の要請、社会からの要請にこたえるものでなくてはなりません。伝統として守るべきものはしっかり堅持し、その一方で人類社会全体の平和と福祉のための学術、これは東大憲章で高らかにうたっている理念ですけれども、これをより現代的な形で押し進めるということが必要です。そのためには、我々が持っているシステムを変えなければならないことも多々あるわけです。

たとえば、科学と学術への信頼というのは、大学の活動の基本にあるわけですが、研究倫理と規範を徹底するこ

とはそのための最重要の課題であると認識しています。また、男女共同参画や若手登用も喫緊の課題です。特に近年、研究者の若手のポストがひっ迫しているという状況があります。学内だけでなく学外にも広く働きかけながら、研究者にとって重要な流動性と同時に雇用の安定性、安心して研究人生を送れる新しいシステムをつくらなければいけないと思っています。

こうしたことを進めるなかで、日本の国民、そして世界から必要とされる東京大学、愛される東京大学となれるよう目指していきたいと思っております。構成員とともに全力を尽くしたいと思っておりますので、皆様にもご支援とご協力をお願いする次第です。

## 記者との質疑応答 (ほぼ全文)

記者●「共創プラットフォーム」という言葉が出てきました。そのために卓越した大学院をつくることも述べられました。現状の大学院への認識と、卓越した大学院とはどういふものか教えてください。それから、流動性と安定性を両立させる雇用の仕組みとはどんなことを構想されているのでしょうか。もう一つ、国の出資事業についての見解を伺います。昨年3月、東大、京大、阪大、東北大に1000億円の国費が出資されていますが、東大は何の動きもしていません、申請もしていない状況です。これについての見解はいかがでしょう。

五神●大学院というのは、研究大学において研究と教育を進めるための重要なシステムです。世界中のトップの研究大学はすでに大学院を活力とした教育・研究を進めています。東京大学も同じです。システム、教育課程としての大学院は、20年前の大学院重点化で大きく変わりました。諸外国にくらべて日本の大学院が規模的に小さすぎるという認識から、大学院を充実させようというもので

した。そこをどのように実装していくかは現在まだ途上の段階です。たとえば、博士人材の育成が十分に機能していない現状があります。博士課程への進学率が上がらないという問題が、東大のようなトップ大学において目だってきています。ビジョンを立て直す必要があるかもしれません。博士人材が社会で活躍できる仕組みを作りたい。これについては就任直後から議論を進めて時間をかけずに実行したいと思っています。

### “若手が安心して研究に取り組める環境にしたい”

いまの話ともつながりますが、研究人材の雇用環境は非常に不安定な状況にあります。科学技術への予算投入とも関係がありますが、期限が決まったプロジェクトの中でのポストの雇用が規模的にも常態化しています。優秀な人材が短期雇用となっているのは非常にもったいない状況です。東京大学は濱田総長のもとで積極的にクロスアポイント制度などを導入してきましたので、それも

活用しながら、若手が安心して長期間研究に取り組める環境にしていきたい。学内だけでやろうとしても規模に限られますので、東京大学がリードしながら全体を大きく動かせるような仕組みを作っていくたい。

3つめのご質問は官民イノベーション事業についてだと思いますが、本学が何もしていないわけではありません。官民イノベーション事業は大学の知を社会に実装するためのものだとして理解しています。知識集約社会の中で、経済活動を含めて社会を活性化するには、知の探求にとどまらず、それを活用するような活動を行うことが必要です。ただ、出資金事業は利益追求の側面があるため、国立大学法人である東京大学で運営するにあたっては、大学の本来のミッションとの兼ね合いをよく考えなければならぬのも事実。大学として制度とポリシーを確立しなくてはならない運用が必要で、特に、組織としての利益相反をどうマネージしていくかが重要。これま

での産学連携の実績を活かす形で、大学としてよりよい制度の整備を進めているところだと認識しています。

### “「知の探求」だけでなく「知の活用」が必要”

記者●総長選考会議議長にお聞きします。「求められる総長像」の3つめに、構成員の幅広い支持を受けていることという項目があります。東大の構成員には学生も含まれていますが、学生には投票権がありません。総長選考会議のなかで、投票権を学生に与えるかどうかという議論はあったのか、おうかがいしたいと思います。

議長●これは私よりも学内の委員のほうがよろしいかと思っております、議長代行からお願いします。

議長代行●ご質問の学生の投票権についてですけれども、今回の総長選考では議論になっていませんでした。

記者●今後検討される予定はあるのでしょうか。

議長代行●今回の総長選考に向けて、改良すべきことは改良するというスタンスです。いろいろな意見を踏まえ(次ページにつづく)

てよりよい総長選考にしていきます。**記者**●研究倫理と規範の話がありました。東大では、論文改ざんや研究費詐欺、不正隠蔽疑惑などの不祥事が相次いでいます。ガバナンスの面で組織的な問題があるのかどうか、ご認識をお聞かせいただけますか。また、東大への志願者数が減る、優秀な学生が海外に行くという動きについては、どうお考えでしょうか。

**五神**●まず研究不正の問題についてですが、学術が社会から信用されるということは学問研究の前提です。これはたいへん重い問題だと認識しています。さまざまな問題が起きていることは承知していますが、大学としての制度整備は着実に進められていると考えています。私が副学長として担当した大学院改革においても、研究倫理教育の徹底については最重要と考えて整備を進めてきました。たとえば、理学系研究科では研究倫理の講義を研究科の共通講義としてカリキュラムを整備したところです。こうした取り組みをもっと進めていきたいと考えております。

もう一つの点についてですが、私の実感では、優秀な学生は東大にきちんと来ているという認識を持っています。私が学生の頃にくらべても学生のレベルは非常に高いし、野心的な学生も多い。東京大学の学術が醸し出す魅力によって優秀な学生を惹きつけることはできているのではないかと思います。そうした学生をより効果的に鍛えるという意味では、外国人留学生等、多様な学生を入れる努力はもちろん必要です。濱田総長が進めてきた教育改革の定着化を図ることが重要だと思っています。

**記者**●ガバナンス上の問題があるかどうかという点はいかがですか。

**五神**●ガバナンスの問題は、専門家の集団である現場、つまり各部局の責任感と緊張感をいかに効果的に高

めるかということにかかっています。ルールで縛ること以上に、現場での議論の緊張感を高めること、精度を高めることが重要だと思います。

**記者**●学校教育法が改正されて学長の権限が強化されました。ガバナンスについて、その権限を使って何かやっていきたいことはありますか。

## “部局の責任感と緊張感を高めることが重要”

**五神**●法人化以降の東京大学が目指す姿は東京大学憲章に記されています。ガバナンスについては、基本構成要素である組織の責任あるガバナンスが基本であるということが述べられています。大学におけるガバナンス強化がこれだけいわれるということは、その仕組みが不十分ではないかと思われること。仕組みの基本となる現場の責任感と緊張感、現場の責任と権限を明確にした上でその責任を全うするという形が不可欠です。大学の価値創造は現場で行われます。専門家同士の緊張感と責任感を高めることがガバナンスを高める一番の近道だと思っています。そのための工夫を考えていきます。

**記者**●議長への質問です。最初の3回の投票で過半数を得る方がいなかったことについて、コメントをいただけますか。また、五神先生にお伺いしたいのは、濱田路線の継承、修正などがあるかということです。引き継ぐべきところと見直すべきところが当然あるかと思えます。特に秋入学がどうなるのか、関心を持っているのですが、いかがでしょうか。

**議長**●前回は最終投票まで行われていたので、そのことについて選考会議で何か意見が出たという事実はございません。委員それぞれ感想はお持ちだったのかもしれませんが、特に発言はございませんでした。私から何か申し上げることもありません。

**五神**●濱田総長の6年間の施策のなかで最も大きなものは、総合的教育改革だと思います。グローバル化の流れのなかで東大の学部教育を前面に打ち出したものでした。外国人留学生がより学びやすい環境をつくることや、初年次教育の充実など、野心的なものがたくさん盛り込まれたと思っています。ご存じのように東京大学は「レイト・スペシャライゼーション」の伝統をもっていますが、初年次にいろいろな体験をさせたり専門分野に触れさせたりすることで、レイト・スペシャライゼーションを効果的に機能させようというお考えであったと理解しています。外国人留学生が学部で学ぶのは語学の問題があつて難しいという現状がありますが、東大の優れた学問を学部の段階から学びたいという外国人学生はたくさんいますので、そうした学生を排除しない仕組みを整備するのは極めて重要だったと思います。

これをどう引き継いで行くのか。私は改革を定着させることが大事だと思っています。教育システムというものは安定も重要です。なぜならば、学びには時間がかかるからです。改革を定着させ、日本全体の教育システム改革につなげていくことが、次のステップになるかと思えます。秋入学は問題提起の一石として非常に大きな効果がありました。そうした議論を進めるなかで教育改革の波が大きく広がったことに重要な意味があった。東大内の閉じた議論におさめるのではなく、より大きな枠組みの議論に広がっていくことが不可欠だと思います。濱田総長は非常に大きな課題に取り組み、成果も十二分にあげたと思いますが、社会に実装化するという点では、議論を大きな枠組みに広げるステップが絶対に必要で、日本全体のシステム改革という視点で取り組む必要があ

ると思っています。

**記者**●男女共同参画を進めるとおっしゃいましたが、東大はまだ女性の参画が不十分で、特に教授には女性が少ないという現状があると思います。具体的なプランがあれば教えてください。

## “本来、研究職は企業より女性が参入しやすい仕事”

**五神**●現在、教授層は諸外国の大学と比べても女性比率が低くて5%程度です。取組みについては日本全体のワーク・ライフ・バランスを見ながら進めていくべきものだと思っています。個人の話でいえば、私の家も共稼ぎです。一般企業だと勤務のフレキシビリティはあまり高くはないかと思えます。しかし、大学の研究職の場合は、裁量労働ですから、ある意味女性が参入しやすい仕事だといえます。いつも女子学生にはそのように話して、研究職を目指すよう薦めていて、そのとおりがんばっている学生も少なくありません。現場によって、学問分野によっても事情は様々かと思いますが、私がいる理学系研究科では、女性や外国人のポスト運用をしやすいような工夫をすでに行ってきていますので、これを全学にも広げたいと思います。

**記者**●研究者になろうと思ったきっかけはどのようなものだったのでしょうか。それと、五神先生の研究内容をもう少しわかりやすく教えてください。

**五神**●私がやってきたのは実験の研究で、半導体の光学的な性質を調べるとか、レーザーを使って物質の性質を調べるとか、レーザーを使って原子のガスを極低温まで冷やして量子物理学の議論を深めるとか、非常に地味で基礎的な研究だといえます。研究者を目指したきっかけについて

## 会見後のぶらさがり取材(抜粋)

**記者**●研究についてもう少し教えてください。

**五神**●レーザーを使って非常に波長の短い紫外線の分析に使う研究は、理学部に移った5年前に始めたことです。ライフワークは、光励起によって半導体の中にある量子物理現象が出てくるかの研究。光をあてると電子と正孔ができてボース・アインシュタイン凝縮が起こり……と、そういった研究です。理学部に移ったときに、10年かけてこの研究を完成させたいと思って、この5年でのかなるところまでできました。総長就任まではなんとか完成させたい。幸い、非常に優秀な学生、助教とチームを組んでやっているので、なんとかなると思っています。

**記者**●総長になると研究の時間は減りますね。

**五神**●研究室にすわっているのは無理ですよ。しかし、研究にはいろいろな形で参加できま

す。私でなければ考えられないこと、私でなければ助言できないことを打ち出すのは、総長をやりながらでもできるはずですよ。

**記者**●大学のマネジメントをやりながらの研究は大変そうですね。

**五神**●大学の運営で大事なことは、先生方の研究の時間をきちんとつくりだすマネジメントだと思います。いい先生が揃っているのに、研究以外の業務が忙しすぎて学生と議論ができないのは学生に申し訳ない。近年は先生方が忙しくなりすぎです。責任と権限を明確化して先生がやるべきこととそうでないことを分け、価値を生み出す時間を確保し、学生に提供する。そうして研究を活性化することが非常に重要だと思います。

マネジメントのやり方を間違えると先生たちの時間を奪うことになります。先生の価値が

出るのは、学生や研究者と頭を使ってディスカッションする時間です。学生と話すという、私が一番楽しいと思う活動が、私の価値を一番よく引き出しているわけです。せっかくいい先生がいるわけですから、そこを活用しないといけません。そのため私の時間を少し切り出すことになりましたが、トータルで見れば大きなゲインがあると思っています。

研究者は自分のアイデアを出してそれを実現するのが楽しいわけです。実験の場に自分で立ち会うこともあるし、運営でも自分でアイデアを出してそれを施策として実現するというものもあります。いままでも、工学系研究科にいた頃は10年ほど執行部にいましたし、理学系研究科でも副学長をやりながら研究を行いました。研究と運営両面で充実感のある仕事をやってきました。

**記者**●総長特任補佐のときは大変だったとか。

**五神**●小宮山前総長の時代ですね。何をし

たかという、学術雑誌の購入の一件です。研究には文献が必要ですが、学術雑誌が高くなって十分には買えなくなりました。そこで、共通の予算で買うことで、コストをおさえ、かつ安定的に購読を維持するシステムをつくりました。雑誌に関する考え方が先生によって違うので、時間はかかりましたね。特任補佐の期間24ヶ月のうち16ヶ月ほどかかって。ただ、趣旨をきちんと説明することで最終的にはどの先生も納得してくれたと思います。

いろいろな分野の先生と真剣な議論をしました。法人化以降はスケールメリットを利用してシステムを変えるのが重要だと思っていたので、雑誌の件はいく例にならざるうと踏んで始めました。そのとき深い議論をした皆さんとはいま問題意識を共有していると思います。それが今回総長に選ばれた要因だったのかもしれないね。

ガバナンスの話と同じですが、それぞれの分野の専門家が責任と緊張感を持ってやっていくことが東大の運営の面ではきわめて重要。下手なトップダウン・マネジメントで現場が責任感を放棄してしまうのは一番よろしくない。現場の先生は優秀でまじめな人ばかりですから、そこを機能させるのが大事。そこは、理学系研究科長になって他部局の研究科長と話すなかで強く感じました。

**記者**●出身高校はどこですか？

**五神**●私立武蔵高校です。有馬朗人先生(第24代総長)の後輩にあたります。理学部出身の総長もそれ以来でしょうか。武蔵高校は物理の教育が充実していました。2代目の校長が山川健次郎先生(第6・9代総長)だった影響もあるかもしれませんね。

**記者**●大学で何をやるかは迷いました？

**五神**●迷ったというより、いろいろなことを体験してみたかったですね。進学した物理学



は、もともと研究者になろうと思っていたわけではなくて、学部時代には本学の特色であるレイト・スペシャライゼーションの中、様々な学問領域を模索しました。建築の原広司先生の授業などにも出ていました。あるとき、物理学が非常に面白いな、勉強してみたいなと思える問題に出遭いまして、選びました。修士は、物理教室で当時発足したばかりの長澤研究室で、一期生でした。大学院に入っている人と実験する中で、自分でやり方を思いついて着手した実験がありましてね。ひらめいてやってみたらうまくいって、いきなり世界がぱっとひらけて見えたという瞬間があったんです。これが研究者になったきっかけです。研究というものには普遍的であり、また国際的な世界にシームレスに入っていけるものだと気付いて、そこに魅力を感じ、以来ずっと研究を続けてきました。

振り返ると、青色LEDの中村修二先生の試料を20年前にもらったこともありますし、スタンフォード大学のウィリアム・モーナー先生と共同研究をしたこともあります。そういういろいろな人との出会いがあり、尊敬する世界の先生方とも非常に親しくつきあわせていただけてきました。中には、東大で私が進めているプログラムに応援に駆けつけてくれる方もいらっしやいます。先日アメリカのジョン・ホール先生にお手伝いしていただきました。

“学生と実験の議論をするのが一番の楽しみ”

休日の過ごし方については、特にこれというものはないんです。総長に決まったらそういうことを聞かれるんだろうなとは思っていたんですが……。休日に限った話ではありませんが、楽しみとしては、学生と物理の実験の話をするのが大好きです。

今日も午前中は研究室のミーティングでいろいろ話して楽しい時間をすごしました。本業なんですけれども、これが一番楽しいし、安らぎを感じることもあります。あとは、休みの日に家族と過ごす時間を大事にしています。

記者●お酒は呑まれるんですか？  
五神●はい。家内と晩酌するのは楽しみの一つではありますね。

記者●4ターム制の導入に関して、濱田総長は学部のうちから留学する学生を増やそうとしていたと思いますが、学部段階での留学は増やしていきたいと思われていますか。また、入学試験についてのお考えは？ それから、理学部と工学部を行き来している経歴について、思うことがあれば教えてください。

五神●日本が島国であることは事実ですし、若い頃から世界のいろんな人々と触れたり、海外を知って自己を相対化することは、きわめて重要だと思います。短い旅行ではなく長いスパンで経験できれば理想的です。費用がかかることですので、財源はどうするかという問題はありますが、東大は積極的にそうした支援をすべきだと思っています。

入試改革も非常に重要です。本学は推薦入試の導入を決めています。私自身は、全て記述式の解答を課す現在の二次試験は、非常に高く評価しています。入試は限られた時間で数千人を評価するという厳しい条件下で行うもの。東大の記述問題は、その条件下で、単なる知識ではなく考える力を見ることに工夫が施されてきた、と自負しています。たとえば英語では、単なる単語の知識を問うのではなく、その場で機転をきかせることが必要な問題が出ています。

そうはいつても、やはりペーパーテストの限界はあります。推薦入試はそうした限界をこえて、各局局が

求める学生を選ぶものだと理解しています。短い時間で答案を作成する入試と違い、本当に来てほしい学生を呼び込める制度としてより有効です。まずは100名程度をとということですが、学生の多様性を確保できるのではないかと期待しています。現在、全国を担当者がまわって高等学校関係者に説明をしながら、より良いシステムにしようということで準備を進めています。これはぜひ成功させたいと思っています。

“理と工の違いを感じたことはあまりなかった”

経歴についても見ていただいてありがとうございます。私は理学部の物理出身で、助手まで理学部にいました。31歳のときに工学部に移りまして、22年間工学部で研究教育をしてきました。自分としては、理と工の区別はあまり意識していませんでした。工学部に長くいましたが、あまり違和感もなく理学部に戻ってきましたね。振り返ると、工学部で長く過ごした時間は財産となっています。工学部には非常に多様な研究分野がありますが、そうしたいろいろな分野の先生と深く議論できたことは、きわめて大きな財産です。

理学部に戻って来て気づいたことがあるとすれば、学生の志向の違いでしょうか。工学部の学生と理学部の学生では少し違う、と感ずることがときどきあります。理学部の学生は、問題の難しさや面白さを示したり、あるいは先生もよくわかってないということや伝えたほうが、チャレンジングな学生が集まってくる。工学部の学生は、どちらかというと計画を立てて着実にこなしていくことに魅力を感じる学生が多いかもしれません。現在、私の研究室ではどちらのタイプもそろっていて、そのことが非常によい効果を生んでいま

す。じつは、研究面でもいまが絶好調という状況です。そこについては明日からきちんと考えないといけないですね。

記者●さきほど、休日にも学生と話すのが好きと述べられましたが……。

五神●それはちょっと誤解でして、休みの日にやることか特にないので、学生と話するのが好きだといったんです。私が学生の頃は日曜も実験ばかりでしたけど、最近は私も日曜は家で休んでいることが多いですから。

記者●総長になると、そのように大好きな実験に時間が割けなくなるように思いますが、たとえそうだったとしても総長になろう、と思った瞬間があれば教えてください。

五神●私は、マネジメントの立場になったから研究の現場を離れるというのは、大学の運営をする立場としてはよくないと思っています。もちろん研究室にいる時間は少なくなると思いますが、学生とともに考えるというマインドは残すべきだと思います。その上で、きちんとした大学らしいマネジメントを追求できればいいな、と。これまでにあまり例はないかもしれませんが、チャレンジすべきことだと思っています。

私が個別に指導した学生ですでに社会に出ていた人たちが、この26年間で100名以上います。彼らが社会に出てから能力相応に活躍しているかどうか、私はいつも気になっていて、社会に出た彼らと話すのも非常に楽しみにしています。そうした意味で、社会に出た彼らに対しても、大学といっしょにやれることはたくさんある。大学のマネジメントの面でチャレンジすべきことはたくさんあるな、と思ったんです。これが、いまこの総長予定者という立場にいることのひとつのきっかけだったのかもしれない。

科は、昔から物理を志していた学生が多かったように思いますが。私は工学部か理学部で迷い、最終的には理学部に入りました。  
記者●研究に進むきっかけになったひらめきというのは光の研究に関するんですか？  
五神●そうですね。こういう実験をしたらこういう現象が起きるのではないかと予測していたときにほんとに思いついたことがありました。修士1年のとき、対象は違いますが、蒲田光一先生の講義を聴いているときに自分の実験に活用できるかも、と思ったんです。当時、実験の腕は未熟でしたが、運良く自分の腕でも大きな効果が出る現象でした。  
記者●いまもその延長の研究をされている？  
五神●その研究も続けています。自分の子どもみたいな感じがあって、大事にしています。4月までに仕上げたいというのはこれです。  
記者●「知の活用」と会見で述べられました。先生の研究はどのように産業界に実装され、

一般人にはどのように役立ちますか。  
五神●昨年 COI STREAM という文科省のイノベーション拠点事業で、私がプランニングして始めたものがあります。レーザー技術を使ってものづくりのイノベーションを起こそうというものです。私たちは、強い光をあてると半導体などの物質の中で何が起るかをずっと探求してきました。産業界と議論するなかで、レーザー光でものを切ったり張ったりする新しい現象が見つかるかもしれないという話になりました。たとえば、スマートフォンの製造のなかでガラスを自由な形に切って加工するのはかなり難しい技術ですが、レーザー光を使えば、光と物質の相互作用を利用して新しいプロセスができるかもしれない。この原理は我々が知の探求で探ってきたものと重ね合う。これを実用化するというチャレンジングな取り組みを始めた。これを進めるには、学生だけでなくOBも必要です。全

世代の人たちに集まってもらって、知の探求の成果を産業実装していくと、日本オリジナルの技術も出てくるはずだ。  
産業界とともにやっていると、アカデミックななかでだけテーマを探しているときにはたどつかないような、アカデミックな価値も高い、おもしろいテーマを見つけたチャンスにもなると思います。私は理と工を行ったり来たりしてきたからより強くそう思っているのかもしれませんが、私はそう思いますが、研究は研究者それぞれの感じ方が大事。純粋基礎研究がいいと考える人はそれをつきつければいいと思います。  
記者●半導体にレーザーをあてる研究？  
五神●半導体に限りません。加工が難しい、ガラスや炭素材料などをどうすればうまく加工できるかというプロジェクトですね。レーザーを物質にあててどう反応するかというのをやってきた基礎研究。強い光をあて

たら半導体の中にどう作用が生じるのか、どんな変化が生じるのか。新たな光が出ることもあります。光として出にくいテラヘルツ波という遠赤外の光を出すとか……つまり研究は楽しいわけです。  
記者●いつもこうやって学生と話している？  
五神●はい。学生たちはもって鏡く「それはこうじゃないでしょうか」とつっこんできますよ。それはとても楽しい時間です。  
記者●酒を呑みながらも話します？  
五神●呑まなくてもそういう話なら何時間でもできます。そういうものだと思います。  
記者●五神研究室には優秀な東大生の中でも特に優秀な学生が集まると聞きました。  
五神●そうだとしたら、それは、チャレンジングなことをやっているのと、あとは、私も答えを知らないということを学生に伝えているからかもしれません。そのように聞いて魅力的だと思う学生がたくさんいるということは、

ぜひお伝えしたいです。とにかく、明るく感じて、若者が元気になるような東大をつくってほしいですね。  
記者●30年前の学生といまの学生で変わったところは？  
五神●英語力は私の学生時代と比べたらはるかに高いと思います。国際会議の招待講演を博士の学生にお願ひしてもまったく遜色ないというくらい立派にしゃべる学生もいます。総じて、学生の幅は広がっていると思います。  
記者●海外経験はいかがですか？  
五神●3ヶ月くらい短いスパンでベル研究所や光の拠点のあるアリゾナ大学に行っていた経験があります。2年間で6ヶ月くらいでしょうか。  
記者●ところで、「五神」というのは珍しい名前ですね。九州ですか？  
五神●いえ、横浜です。  
広報課長●時間ですので、このへんで……。



# ひょうたん島通信

大槌発! 第23回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## 大槌湾でカモシカ採集!? ～国際沿岸海洋研究センターでの日々是好日～

### 青山 潤

大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター教授

本年4月2日、大槌町のセンターで着任の挨拶を終えた直後、チリ地震による津波注意報発令を知らせるサイレンが町中に鳴り響いた。目の前には東日本大震災で崩壊した防潮堤が横たわり、緊急避難的に積み上げられた土嚢が、大槌湾の静かな波を受け止めている。さて、何をどうすればよいのだろうか? 津波到達予想時刻までには、まだ十分な時間的余裕もあった。センター教職員からの確かな指示もあった。無かったのは、挨拶以外を想定していなかった私の着替えだけだった。翌朝、まだ暗い道を軽快な作業着姿で走る河村センター長の後ろから、スーツに長靴の間抜けな出で立ちでドタドタとついて行く。念のため港外へ避難する調査船「弥生」の綱取り放しのためだった。そして、まんじりともせず迎えた津波到達予想時刻。幸いなことにどれか津波かわからぬほど、大槌湾は穏やかであった。

5月21日、篠突く雨に叩かれながら、底生生物のサンプリング実習を終えた弥

生は、港へ向かっていた。「何ですかね?」船長の平野さんと船頭(マクロ船などで作業全体を総括する親分をこう呼ぶ)の黒沢さんが、遠く雨に煙る海面に目を凝らしている。近づけば、それは必死に海を渡ろうとする小さなカモシカだった。状況を確証した弥生がゆっくりと回頭を始めた。突然、カモシカはクルリと方向を変え、こちらへ向かって泳ぎ始めた。余計な波を立てぬようソロソロと進む弥生は、たちまち追いつかれてしまう。船にまわりつくカモシカは、かなり弱っているようだ。このまま置き去りにするのは忍びない。早速、船上からタモ網が突き出され、海洋調査にありえぬカモシカ採集が始まった。ブルブルと震えるカモシカは、すいぶんと素直に船上に収容され、我々とともに港へ向かうこととなった。ところで、相手は名にし負う「特別天然記念物」である。捕獲など言語道



断のはずだ。しかし、捕まえてしまった…、それも、海で、タモ網で…。ふと我に返った船頭の指示で、センター事務を通じて大槌町役場へ連絡を取ってもらった。こうして我々も、カモシカも事なきを得たのだった。

ひょうたん島を間近に臨む国際沿岸海洋研究センターの立地を生かし、何か新たなテーマを見つけたい。文献を漁る傍ら、旋網船や定置網船に乗せて貰ったりもしている。そして今、ほんのわずかだけれど、大槌湾という宝箱の蓋に手が掛かったように感じている。

## ぴーちゃん日記

### 錦織“圭”は2015年の全豪と全米で優勝するかも知れない

東日本大震災から3年8ヶ月となった11月11日(十一月十一日は“圭”の字を表す。“鯉”の日です)、大槌町さげます第2ふ化場の復旧工事が完了し、竣工式が行われました。大槌町は新巻鮭発祥の地で、ふ化事業は105年の歴史があり、震災前は3ヶ所のふ化場で約3300万匹の稚魚を放流していました。今回完成した第2ふ化場は約3900㎡の敷地に、長さ15mの飼育水槽を38基整備し、その生産能力は1000万匹。2012年秋に復旧した第1ふ化場と合わせて2000万匹の放流が可能になりました。

三陸沖に回帰するサケは例年半数を「4歳魚」が占めており、今年は震災のあった2011年春の稚魚が4歳魚にあたるため、不漁が見込まれています(10月31日現在で昨年同期の88%の水揚げ)。採卵数も同様であり、このままでは不漁が毎年繰り返される恐れがあるため、岩手県では初めて沿岸部全域一斉実施で、「海産親魚」を採卵用に利用します。海産親魚とは、本来は食用である海で捕獲した雌のサケのことで、通常はそのまま魚市場に運ばれるものですが、少しの間ふ化場に運び込んで採卵します。1匹でも多く放

国際沿岸海洋研究センター職員「ぴーちゃん」です。2013年4月より、岩手大学から出向で来ています。趣味はテニスです。

流稚魚を増やしたいところでのふ化場完成は、サケの定置網漁収入の割合の大きい大槌水産業復興の大きな後押しとなると思います。

沿岸センターでは、大槌町と釜石市の各漁協からご理解と同意をいただき、岩手県から特別な許可を得て貴重なサケの仔稚魚を採集して研究を行っております。研究者は震災後なお一層漁業者と協力し、漁業にも役立てばとの熱い思いで研究に励んでいます。全ての取組が実を結び、数年後大漁に湧く三陸沿岸の魚市場を見たいと強く願っています。

制作：大気海洋研究所広報室(内線：66430)



# ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第20回

谷本 知嘉子 本部渉外・基金課主任

## 学生報告会も 渉外活動!?

渉外本部(含: 渉外・基金課)では、寄附を直接獲得すること以外にも、様々な活動をしています。その中の大事な業務の一つとして、学生報告会があります。これは奨学金プロジェクトに支援を寄せて下さった寄附者・企業に対して、学生自らが報告を行って謝意を表す会です。学生募集を行う部署では、募集の段階からこうした会があることを学生へ告知し事前レクを行い、渉外本部では主に、寄附者の意向や出欠状況を確認し、参加者が満足できるようなイメージをしながら準備をします。当日は、初めこそ学生と寄附者に距離がありますが、どの会も終わりの頃には、会場のあちこちから笑い声が聞こえてきて、積極的に卒業生や企業担当者に声をかける学生の姿も見かけます。担当者としてはほっとする瞬間です。

こうした会を行う目的は三つあります。まず、当然のこととして支援者に寄附の使途や成果を報告するため。二つ目は、学生に物心共に支援をして下さる方や寄附の存在を知って欲しいため。そして三つ目は、追加の寄附に繋がる可能性があるためです。

渉外というと、営業マンのようなスタッフが外に出てお願いをするというイメージが先行するかと思います。しかし、学生の成果報告や土産話、学内教職員の笑顔によって、寄附者の満足度が高まり、次への支援のきっかけとなっていくのです。学生、学内の教職員が協力して開催するため、毎回大がかりで準備には時間がかかります。しかし、大学一丸となって御礼を伝えることは、「東大の渉外活動」という一面もあるのです。

今回は、渉外本部のあんな話もこんな話も? スタッフ覆面座談会の号となります。お楽しみに!!



報告会の様子。学生も次第に積極的になってきます。

東京大学基金事務局 安田講堂寄附第1次締切は12月末!

TEL 03-5841-1217 E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp  
内線21217 URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

# 留学生さん いらっしやい!

第18回



海を越えて東大に来た学生に聞きました。



インド

マヘンドラ・クマル・パルさん

Mahendra Kumar Pal

工学系研究科社会基盤学専攻  
博士3年

カーンプル出身。趣味は旅行。インド留学生会の会長として、文化やスポーツなど様々なイベントの企画運営に奔走しています。

## Q. どうして日本/東大に来たの?



地震の研究をしたくて、それなら日本しかないと思いました。インド工科大の恩師が今の指導教員と知り合いという縁もあり、JICA奨学金で東大へやって来ました。

## Q. いま学んでいるのはどんなこと?



数値配合を使った破損現象シミュレーションを開発しています。将来は教員になって後進育成に関わりたいかも。ただ、インドでも地震などの自然災害が増加しているので、ゆくゆくは国へ帰って防災研究に貢献したいです。



## Q. 日本/東大で困るところは?



授業でも研究室でも英語が使えるので、困ったことはあまりないですね。日本語をもう少し勉強したいけど、時間がないのが悩みです。

## Q. 日本/東大で好きなところは?



好きな分野で好きな方法で勉強できる、自由で自主的な雰囲気が大好きです。東大は国際化に力を入れていて、英語の情報や留学生の数が増えている所もいいですね。国際化といえば、東大生は優秀でみんな英語が話せるので、もっと自信をもってほしいかな。



## Q. インドのいいところは?



出身地カーンプルは革製品が有名です。工場の臭いはさておき、本物の革製品は素敵です。ウールも有名です。写真は歴史あるウール会社の建物で、「ラル・イムリ」と呼ばれてます。



協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

## ワタシのオシゴト 第106回

RELAY COLUMN

薬学部・薬学系研究科執行チーム 島津 斉明

## 薬学部の何でも屋見習い



これでも机を片付けました……。

会計畑でない、チーム名だけでは仕事内容がよくわからないかもしれません。かく言う私も内示のときに、「え？何するのそこ？」と思ったのをよく覚えています。はたしてその実態は予算の「執行」、未払金伝票や100万円以上の契約の処理などを担当するチームです。

とは言え、業務はそれだけではありません。小さい部局の常で、施設や情報の部署のない薬学部では、それらの仕事を執行チームが担っています。伝票を打ちながら、研究室から依頼を受けて修繕業者を呼んだり、蛍光灯を交換したり、メール・アドレスの設定処理をしたり。折角小さな部局にいますので、トラブルがあればなるべく足を動かして現場に赴き、機会があれば先生方や学生たちとコミュニケーションを取るようになっています。

未熟者ではありますが、気さくで親切な事務室のみなさんに支えられ、仕事にあたる日々です。



クリスマスということで、トナカイ。

得意ワザ：折り紙（へっぽこながら創作も）  
自分の性格：この余白はそれを書くには狭すぎる  
次回執筆者のご指名：鷗川健也さん  
次回執筆者との関係：前の職場での大先輩  
次回執筆者の紹介：必殺仕事人

## Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第109回

## 商標ってどんなもの？（その2）

「学内広報」1456号で、「商標」は、「事業者が、他人の商品やサービスと区別するために使用するマーク」であり、マークそのものだけでなく、それをどのような商品やサービスに使うのかを考えることも大切になる、ということを説明しました。

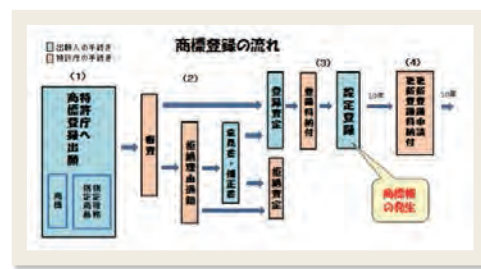
そのような「商標」は、特許庁に出願し、審査を経て登録が認められ、初めて「商標権」という権利が発生します。今回は、どのようにして「商標権」が発生するのかについて、簡単に説明したいと思います。以下の番号は下記図の番号に対応しています。

(1) まず、特許庁に商標登録出願を行います。出願においては、登録を受けたい「商標」と、それを使用する商品／サービスを指定します。（商標法では、サービスのことは「役務」と言い、指定した商品のことは「指定商品」、指定した役務のことは「指定役務」と言います。）実際には、指定商品・指定役務は「区分」と呼ばれる45の分類で指定します。例えば、「東京大学」が「教育」に使うための商標を出願する場合は、第41類（技芸・スポーツ又は知識の教授、電子出版物の提供、図書および記録の供覧、学術的資料の展示、…）を指定します。

(2) その後、出願された商標が登録できるかが審査されます。審査においては、商標同士が類似するか否か、商品／役務同士が類似するか否か等が判断されます。類似する場合は、他人の商標と混同すると認定され、登録できない理由を記した拒絶理由通知書が出願人に発送されます。それに対し、出願人が意見書・補正書を提出し、拒絶の理由がなくなれば登録査定となり、なくならなければ拒絶査定となります。

(3) 登録査定となり、登録料が支払われると、商標権が発生します。商標権が発生すると、登録された商標を、独占排他的に、指定商品や指定役務に使用することができるようになります。

(4) 商標権の存続期間は10年ですが、それ以上使用する場合は、更新登録の申請を行います（何度でも更新可）。



<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>



## インタープリターズ・第89回 バイブル

総合文化研究科・教授  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

廣野 喜幸

### 「なぜだろう、なぜかしら」 ～新シリーズの変貌編～

私が自然科学好きになったきっかけのひとつは、小学生時代の理科の副読本『理科の学校なぜだろう、なぜかしら』（実業之日本社、1955-6年）シリーズであった。教科書だけでは解消されない疑問が1問1答形式で次々と解き明かされてゆくのは無上の快感であった。同シリーズは、1977年にビジュアル化されリニューアルを果たしたが、1997年以降品切重版未定が続く。「こうしたスリリングな体験が理科好きの後押しをするのに、小学理科の副読本は不振なのか」と落胆していたところ……

どっかい、小学理科副読本は活況を呈していたのですね。『理科なぜどうして』（偕成社）、『なぜなに理科』（小学館）、『なぜ？ どうして？ 科学のお話』『なぜ？ どうして？ もっと科学のお話』『なぜ？ どうして？ 科学なぞとき物語』（以上、学研）、『なぜ？ どうして？ 科学の不思議親子で楽しめる！』（池田書店）、『たのしい！ 科学のふしぎ なぜ？ どうして？』（高橋書店）、『米村でんじろうのイッキに読める！ おもしろ科学』（講談社）、『レイトン教授のふしぎ！ なぜ？ 科学の話』（主婦と生活社）、『10分で読める！ わくわく科学』（成美堂）。フェイドアウトしたのはわが『なぜだろう、なぜかしら』のみかとさびしく感じていたところ……

2012年12月、ついによみがえってくれました。ビジュアル化を受け継ぐことなく、先祖返りしていました。質問項目も106項目から40項目へと減少し、2分冊が1冊にスリム化していた。質問項目の内容は……、あれ、前シリーズと同じ質問がない。コミュニケーションはその名の通り、双方向的であるのが当たり前である。ところが、科学コミュニケーションは一方的になりがちなのですね。受け取る側の思いはなんのその、伝えたいことを一方的に伝達し、ほとんど何も伝わらず、受け手側はその後敬遠するようになる失敗パターンを繰り返す。

そうではなく、同シリーズは、子供たちから質問を集め、双方向性がはかられていたのが画期であった。第3シリーズの項目内容が第1・第2シリーズと異なっていることは何を意味しているのだろうか。子供たちの質問内容が変わったのだろうか。それともリサーチをしなくなってしまったのだろうか。う～ん、気になる。この点についてはまた次回。再見！

科学技術インタープリター養成プログラム  
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 救援・ 復興支援室 より

第43回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### 救援・復興支援室の活動(12月～2月)

12月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
12月～2月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア

### ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



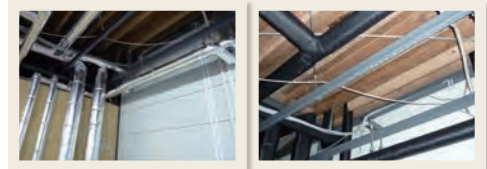
文：佐藤 克憲

本年2月発行分学内広報の本欄において、当分室で管理を行っているプレハブ施設「遠野東大センター」について、水道管凍結防止工事を行ったことを記しました。経費面も考慮し、通常であれば凍結しない最低限の工事を行ったのですが、実は昨年度の冬はそれでも、給排水管が壁寄りであって管が冷えやすいバスルームや洗濯乾燥機において、水が出なくなったり、排水管の曲がった部分の水が凍結して排水できない結果水があふれ出し、センターが水浸しになるといったことがありました。遠野の冬恐るべし……

その辺りを踏まえ、本格的な冬に入る前の11月下旬に、改めて大がかりな水道管凍結防止工事を行いました。遠野東大センターは2階建てなのですが、昨年は1階、2階それぞれの床から上の部分のみの工事を行ったところ、今回は1階倉庫内の天井から壁伝いに露出している部分は勿論のこと、1階床下部分までを含めて給排水管沿いにヒーターを取り付けた上で、保温材をしっかりと巻いてもらいました。床から上の部分には新たに吸気弁も付けてもらい、説明は省きますが、「水抜き」も楽に行えるようになりました。

今年度こそは凍結0で過ごせます(はず…)ので、救援・復興支援室登録プロジェクト構成員の皆様の更なるご利用をお願い申し上げますとともに、冬季に学習支援ボランティア(遠野東大センターを拠点に現地へ向かいます)へ参加する学生の皆さんも、活動期間中のセンターの給排水に関しては安心してお越しいただければと思います。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左) アルミ付き保温材が巻かれた、工事後の給排水管。  
(右) 工事前の状況(昨年度の洗濯乾燥機水漏れ時)。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html)

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線 : 21750 (本部企画課)

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
11月12日	低温センター	平成26年度低温センター安全講習会(第4回・第5回)開催	10月21日～29日
11月14日	環境安全本部	平成26年度本部・部局合同防災訓練実施される	11月4日
11月17日	産学連携本部	さわやか信用金庫ビジネスフェアに出展しました	6月10日
11月17日	産学連携本部	第15回ビジネスフェア from TAMAに出展しました	11月6日
11月19日	医科学研究所	医科学研究所で動物慰霊祭が行われる	11月13日
11月19日	カブリ数物連携宇宙研究機構	第11回 Kavli IPMU/CRR 合同一般講演会「宇宙を捉える」を開催しました	11月15日
11月25日	本部国際交流課	Amgen Scholars Programの記者会見を開催2015-16年にサマープログラムを実施	11月19日
11月25日	医科学研究所	東京大学国際交流イベント「知ろう!知り合おう!白金台キャンパス」を開催	10月31日
11月27日	本部広報課	次期総長予定者に五神真大学院理学系研究科長・理学部長を選出	11月27日
11月28日	本部留学生・外国人研究者支援課	「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成26年度(10月期)研究奨励費受給者証書授与式」を開催	11月26日
12月1日	本部学生支援課	『本郷の学生生活2015』表紙イラストの表彰が行われました	12月1日
12月3日	サステイナブルキャンパスプロジェクト室	IARU サステイナブルキャンパス交換学生の帰朝報告会を開催	9月1日～29日
12月3日	本部外部資金課	平成26年度「科研費」審査委員の7名表彰される	12月1日
12月4日	本部学生支援課	東大女子サッカー部、始動	9月7日～11月2日

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
12月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	<a href="http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)">http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)</a>
12月15日	本部広報課	退職教員の最終講義(1月開催分)	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3403/">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3403/</a>
12月15日	本部広報課	本年秋の紫綬褒章受章・文化功労者顕彰	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3238/">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3238/</a>



## CLOSE UP 本部・部局合同防災訓練を実施しました(環境安全本部)



懐徳園内での避難の様子。

11月4日(火)、平成26年度本部・部局合同防災訓練を実施しました。本部では、災害時における部局との連携や支援・協力体制の構築等を目指し、部局と合同での防災訓練を実施しています。4回目になる本年度は、本郷キャンパスの4部局(医学系研究科、薬学系研究科、東洋文化研究所、総合研究博物館)および弥生キャンパスの3部局(農学生命科学研究科、分子細胞生物学研究所、地震研究所)に、弥生キャンパス内の総合研究棟、I-REF棟、農学部生協も参加して行いました。

14時30分に震度6強の首都直下型地震が発生したとの想定のもと、濱田総長をはじめとする本部および各部局学生・教職員、農学部生協の

職員・利用者、学内企業関係者等の避難、安否確認訓練を行い、その後、教職員は、学生の保護・誘導、初期消火、情報連絡等の各担当に分かれて訓練を行いました。また、本部および各部局で災害対策本部を設置し、情報収集や各本部間の連携、意志決定等の訓練を行いました。

特に今回の訓練では、複数部局が入居する建物における避難の検証の他、バイオサイエンス、化学物質、火災等の被害について部局毎にテーマを設定し、実際に被害がおきた場合の対応について確認が行われました。多くの学生の参加協力も得ることができ、全学防災体制の充実のために重要な示唆を得た訓練となりました。



CLOSE UP

東大女子サッカー部、始動 (本部学生支援課)



ボールを繋ぐ、気持ちを繋ぐ。

「なでしこジャパン」の活躍もあり、近年注目の高まる女子サッカー。今年、本学でも女子サッカー部が始動しました。創設は2014年2月。本学運動会ア式蹴球部内に女子部が置かれました。創設後は、メンバー集めをしながら練習を積み重ね、関東大学女子サッカーリーグの3部に参戦。9月7日(日)から11月2日(日)まで9試合を戦い抜きました。結果は、4勝4敗1分けの4位。創設直後には上々の滑り出しと

なりました。とはいえ、現在の部員数は7人。他の運動部と他大学の女子サッカー部から数人メンバーに入ってもらって試合を行うなど、改善すべき課題は多く残っています。「東大でもサッカーをやりたい!」という一人の女子学生の熱い思いから始まった東大女子サッカー部。いろいろな方の協力や支援をいただきながら、ひたむきに成長中です。応援と支援をよろしくお願いたします。



CLOSE UP

国際交流イベント「知ろう!知り合おう!白金台キャンパス」開催 (医科学研究所)



参加者集合写真。

10月31日(金)、第1回東京大学国際交流イベント企画コンテストで採択となった企画「知ろう!知り合おう!白金台キャンパス」を開催しました。この企画は、医科研の歴史を学ぶ見学会と懇談会を組み合わせ、医科研を中心とした人的ネットワーク作りを提案するもの。当日は、日本人学生16名、留学生25名、外国人研究者6名、教職員等9名の計56名が参加しました。

近代医科学記念館では、大学院生が伝染病研究所時代の写真を映しながら説明し、創立122年の歴史について紹介。レストランでの懇談会では、グループ単位で競うクイズを行い、本学

や医科研についての知識と愛着を深めました。今回は、全学の国際交流イベントとして開催することで、所内イベントの枠を超えて、白金台ロッジ在住者も参加対象に加えることができました。普段から交流することで顔見知りになっていれば、地震等の災害時に協力し合えます。また、白金台ロッジ在住者にも医科研に愛着を持って頂くことで、安心して生活することができるのではないかと思います。今回築いた白金台キャンパスの人的ネットワークと信頼関係を維持・発展できるよう、今後も取り組んで行きたいと思っています。



CLOSE UP

Amgen Scholars Programの記者会見を開催 (本部国際交流課)



杉万俊夫 京都大学副学長・理事、デイビッド・M・リース アムジェン米国本社バイスプレジデント、江川雅子理事(日本では東大と京大がプログラムに参加)。

<http://www.amgenscholars.com/>

東京大学は、アムジェン財団から2年間の寄附をいただき、学部学生を対象とした研究室体験プログラムを中心とする「Amgen Scholars Program」を実施することになりました。世界の有名大学で夏休みに実施される研究室体験を通じて次世代の研究者を育てるプログラムです。これを記念し、11月19日(水)、伊藤国際学術研究センターで記者会見を開催。挨拶の中で江川雅子理事は、「Amgen Foundationとの新しい関係を築くことができ、大変光栄に思っています。参加学生が自然科学分野での研究のキャリアを築いていく一助となることを、そして将

来、大学院学生として本学へ戻ってくることを期待しています」とコメントしました。本学のプログラムは、2015年6月~7月の8週間で実施され、受入予定学生数は20名(うち海外の大学の学生15名、本学を含む日本の大学の学生5名)。参加者には往復渡航費、滞在費等が支給されます。参加学生は、学内の5部局(工学系研究科、理学系研究科、農学生命科学研究科、薬学系研究科、生産技術研究所)の研究室の一つに配属され、研究体験活動を行うほか、学内施設見学や説明会、イベントなどに参加します。申請受付は2015年2月2日まで。多くの応募をお待ちしています。

第65回駒場祭 ~おもしろ模擬店看板集 11月22日(土)~24日(月・休)に駒場祭が開催されました。今年行けなかった人はぜひ来年会場へ!





## 学会で写真を撮るな(記念写真以外は)

とある研究会で講演をしてきた。最初のスライドから写真を撮る方がいたので、「本日の講義の内容には未発表データがありますので写真撮影はご遠慮下さい」と伝えた。国内での講演会ではこの頃写真を撮られることが多い。欧米の講演会ではほとんど撮られないことを考えると、日本特有なのだろうかと思う。

講演中に写真を撮られるのが困るのは、実は未発表データのせいではない。端的に不快なのである。下品に思うのである。しかし、不快ですからと言うと角が立つので、生データのせいにしてている。私は動物行動学、神経科学、心理学にまたがる研究をしているが、どの学会でも写真を撮る方はいる。私が主宰の場合には、写真撮影はご遠慮下さいと最初に伝えるようにしている。また、一般向けの講演会の場合には、主催者をお願いしておくようにしている。私は出し惜しみをしているのではない。むしろ、発表のPDFファイルを希望者には差し上げているし、そのことを発表でお伝えしている。

学会で資料の写真を撮る行為を私が不快に思うのはなぜだろう。情報を写すという点ではノートを取るのも同じだが、ノートは自分の手を動かす。写真はボタンを押すだけだ。

挨拶もない。本人の努力がほとんど無であることが、下品さの源であろう。こちらが苦勞して得た成果を、自分の手も動かさず持って帰ろうとするなよ。当然、写真全般を否定しているのではない。表現としての写真はこれとは別物である。問題にしているのは、ノート代わりの写真である。

そもそも学会は、研究の途中経過を議論するところだった。だから、発表の写真撮るのは万引きに相当する。ところが、特に神経科学の分野では、論文が受理されるまで学会発表すると言うラボも近年はあるらしい。そのようなラボの成果であれば、大いに写真をとって宣伝してやればよいのかも知れない。そもそも学会の場が宣伝の場になってしまったことが、写真を撮る行動を増長したのかも知れない。しかし、私の言いたいのはそういう問題ではない。下品だ、ということである。趣味の問題、と言われるかも知れない。結構である。少なくとも私は自分の学生には学会では記念写真以外撮るなと言っている。知識を得る努力に手抜きをしてはいけない。

岡ノ谷 一夫  
(総合文化研究科)